

## ダニエル書 11 章 — 解釈が分かれる難解な章 — ©H.Taniguchi 2020.03.15



【お断り】 以下は、解釈が分かれることを前提として、個人的に研究、整理、まとめたものである。

④話は、ダニエル書 10 章 20 節「彼は言った。」の次にある左括弧（「）から始まり、12 章 4 節の右括弧（」）まで続いている。その間の（ガブリエルの）話（黙示、預言）として記されているのが 11 章である。

④英語版聖書【NIV】NEW INTERNATIONAL VERSION では、第 11 章 1 節の後（2 節の前）に The Kings of the South and the North のタイトルが付されている（新共同訳等にはない）。

11 : 01 彼（大天使長ミカエル 10 : 13、12 : 1 / 天使長ミカエル 10 : 21）はわたし（天使ガブリエル 8 : 16、9 : 21、ガブリエル＝神は力がある / 他、ルカ 1 : 19、26 に登場する）を支え、かづけてくれる。

→④聖書協会共同訳では、口語訳にあった「私は、メディア人ダレイオスの治世第一年に、彼を励まし、かづけるために立ち上がった。」が復活（新共同訳 11 : 1 は 10 : 21 へ移動）している。

### ダニエル書 11 章における歴史描写の検討

- ・ 2～20 節 キュロス王からアンティオコス 4 世即位前までの約 360 年を凝縮した記述
- ・ 21～45 節 アンティオコス 4 世の即位からその最期の約 10 年を詳細に記述
  - ①王の即位（11 : 21～28）、②王の迫害（11 : 29～35）、③王の傲慢（11 : 36～39）
  - ④王の最後（11 : 40～45）

02 さて、お前（ダニエル）に真理を告げよう。見よ、ペルシアになお**三人の王**（諸説あり）が立つ。

→①**カンビュセス 2 世**：アケメネス朝ペルシア第 2 代の王（在位：BC530/529～522）

父：アケメネス朝ペルシア初代国王**キュロス 2 世**、母：カッサンダネの長子

②**偽スメルディス**＝ガウマタ（ガウマータ）→参照 P. 3

カンビュセス 2 世がエジプトに遠征している間に、本国ペルシアを任せていたマギ（マゴス僧、メディア王国で宗教儀礼をつかさどっていたペルシア系祭司階級）のパティゼイノスが反旗を翻した。パティゼイノスには容姿がスメルディスに生き写しの弟ガウマタ（ガウマータ）がおり、ガウマタがスメルディスに成り済まし（＝偽スメルディス）、ペルシアの王位を篡奪（さんだつ）したという。

③**ダレイオス 1 世**：ダレイオス 1 世ヒスタスパス。アケメネス朝ペルシア第 3 代の王

在位：BC522～486 年。偽スメルディスを追い出して王位に就いた。

古代ギリシア・アテネの歴史家、「歴史の父」とも呼ばれるヘロドトスによれば、ダレイオス 1 世はカンビュセス 2 世の槍持ちとして親衛隊にいたという。この職業は王に極めて近い人物のみが付く高い職である。

ダレイオス 1 世が歴史の舞台に登場するのはカンビュセス 2 世の死去（BC522）とその後の王位継承の争いの頃で、ヘロドトスの「歴史」によると、アケメネス家の傍系のヒュスタスパスの子であったが、初代キュロス 2 世の娘アルテュストネと結婚、第 2 代カンビュセス 2 世のエジプト遠征に従って功績を挙げた。カンビュセス王の死後に反乱が起こると、彼がそれを鎮圧して第 3 代の王位に就いたという。

02（後半）次に、**第四の王**（→アケメネス朝ペルシア第 4 代の王**クセルクセス 1 世**、ヘブライ語：アハシュエロス、在位：BC486/485～465、父：ダレイオス 1 世、母：アトッサ）はだれにもまさって富み栄え、富の力をもってすべての者を動員し、ギリシア王国に挑戦する。

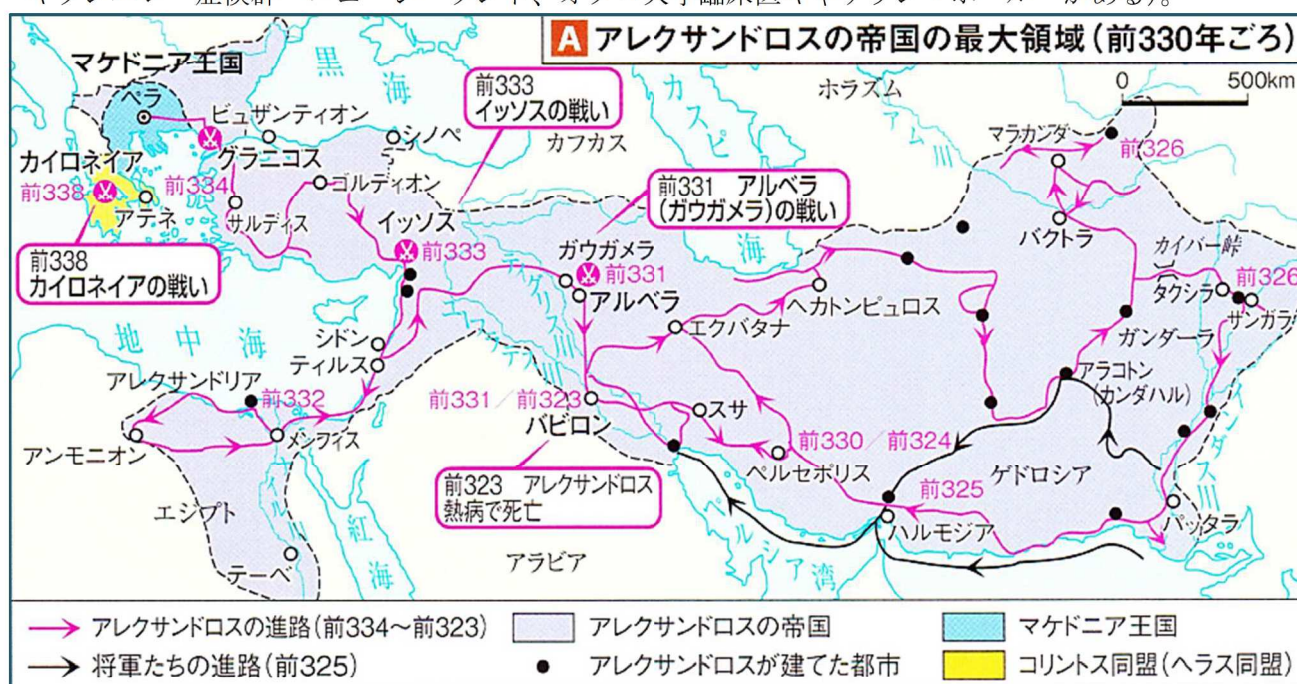
→**クセルクセス 1 世**は、ギリシア遠征に失敗した、父ダレイオス 1 世の意志を継ぎ、BC480 に大軍を率いギリシア遠征（**第 3 次ペルシア戦争**）。ダーダネルス海峡を押し渡り、ギリシア本土を南下、**テルモピュライの戦い**でレオニダスの率いるスパルタ陸軍を破り、制圧に成功した。しかし同行したペルシア海軍が、アテネのテミстокレスに率いられた海軍と戦い、**サラミスの海戦**で大敗、クセルクセスはペルシアに引き揚げた。翌年、ギリシアに残ったペルシア軍は、ふたたびアテネ・スパルタ連合軍と**プラタイアの戦い**で敗れ、さらに海軍も**ミュカレの海戦**でふたたびアテネ海軍に敗れ、ペルシア帝国のギリシア遠征は失敗に終わった。ペルシアに戻っていたクセルクセスはその後、部下の謀反にあい、殺害された。



03 そこに、**勇壮な王**（口語訳：ひとりの勇ましい王→**アレキサンドロス 3 世**）が起こり、大いに支配し、ほしいままに行動する。

→アレキサンドロス（アレクサンドロス）3 世、BC356～BC323、在位 BC336～BC323

- BC356、ギリシア北部の山岳地帯マケドニア王国出生（父：フィリッポス 2 世、母：オリュンピアス）  
→マケドニア王国は馬の産地で、アレキサンドロスは「ブーケファラス」という愛馬を持つ。
- BC343（13 歳）、家庭教師、哲学者アリストテレスから帝王教育（文学、哲学、医学、天文学）を受ける。
- BC338（18 歳）、**カイロネイアの戦い**（フィリッポス 2 世×ギリシアのアテネ・テーベ連合軍）で圧勝し、ギリシアを制圧。
- BC336（20 歳）、マケドニア王に即位（フィリッポス2世、祝宴席で護衛官のパウサニ阿斯により暗殺）。
- BC334（22 歳）、ダーダネルス海峡を越え、東方（ペルシア）遠征開始（10 年間におよぶ大遠征）する。
- BC333（23 歳）、**イッソスの戦い**（マケドニア軍×ペルシア軍）でダレイオス 3 世戦線を離脱し、勝利。
- BC332（24 歳）、エジプト遠征。→この時、**パレスチナ征服**→ヘレニズム時代の始まり
- BC331（25 歳）、**ガウガメラの戦い**、再びダレイオス 3 世逃亡し、勝利。
- （ダレイオス 3 世、側近により暗殺）、**アルベラの戦い**・・・
- BC326（30 歳）、北西インド侵攻、BC323（32 歳）バビロンで死去（死因は、熱病等諸説あり、最近ではギランバレー症候群－ニュージーランド、オタゴ大学臨床医キャサリン・ホールーがある）。



出典(図)：最新世界史図説 ヘレニズム時代（帝国書院）

### 【参考】アレキサンドロス 3 世

アレキサンドロス 3 世（BC356 年 7 月 20 日～323 年 6 月 10 日）、通称アレキサンドロス大王。

古代ギリシャのアルゲアス朝マケドニア王国の君主（在位：BC336～323 年）である。また、コリントス同盟（ヘラス同盟）の盟主、エジプトのファラオも兼ねた。ヘーラクレースとアキレウスを祖に持つとされ、ギリシアにおける最高の家系的荣誉と共に生まれた。ギリシア語ではアレキサンドロス大王であるが、英語風に読んでアレクサンダー大王またはアレキサンダー大王とすることも多い。アラビア語やペルシア語などではイस्कンダルと呼ばれている。



出典：ウィキペディア等



### 【参考】 偽スメルディス(ガウマタ)

古代ギリシア・アテネの歴史家、「歴史の父」とも呼ばれるヘロドトス※<sub>1</sub>によれば、アケメネス朝ペルシア第2代の王**カンビュセス2世**（在位：BC530/529～522、父キュロス2世、母カッサンダネの長子）は弟である**スメルディス**（Smerdis、父キュロス2世、母カッサンダネ、カンビュセス2世の弟）による王位（帝位）**篡奪**を恐れ密かに殺害した（夢のお告げで弟のスメルディスに王位を奪われるのではないかと疑念を抱き、密かに殺させた）。—スメルディスの死は知られる事はなかった—

—ところがこの秘密裏が仇となった—

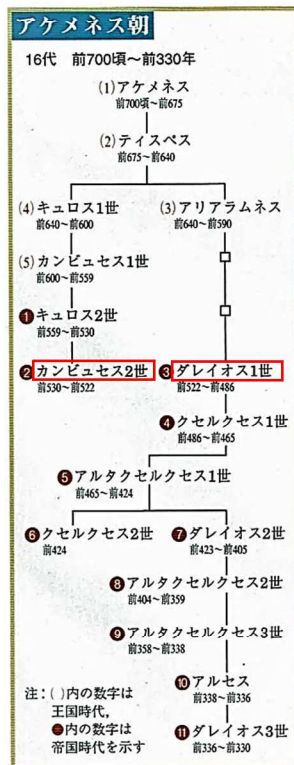
**カンビュセス2世**がエジプトに遠征している間に、本国ペルシアを任せていた**マギ**（マゴス僧、ラテン語: magi 複数形、単数形はマグス magus）※<sub>2</sub>の**パティゼイノス**が反旗を翻した。

パティゼイノスには容姿がスメルディスに生き写しの弟**ガウマタ**（ガウマータ）**ガウマタ**が**スメルディス**に成り済まし（=**偽スメルディス**）、ペルシアの王位を**篡奪**したという。

カンビュセス2世はエジプトからの帰国の途上、シリアでこの知らせを聞き、**ガウマタ**（偽スメルディス）を打倒するため、急ぎ戻ろうとしたが、乗馬する際に剣の操作を誤って負傷し、シリアの**アグバタナ**（エクバタナ）で死去した。



出典：世界史の窓



こうして**パティゼイノス**と**偽スメルディス**がペルシアの支配権を握ったが、即位8カ月目にパルナスピスの子**オタネス**（ウターナ）が正体を暴き、**ダレイオス1世**を含む7人の同志—①オタネス（ウターナ）、②アスパティネス（アシユパカナ）、③ゴブリュアス（ガウバルワ）、④インタプレネス（ウィンダファルナフ）、⑤メガビュゾス（バガブクシャ）、⑥ヒュダルネス（ウィダルナ）、⑦**ダレイオス1世**（ダーラヤウ1世）—で、マギ（マゴス僧）の兄弟を排除した。

事が済んだ後、①～⑦の7人は国制をどうするかについて議論したがまとまらず、城外に騎乗して遠乗りし、日の出と共に最初に馬がいなない者が王となることを定めた。そして、アケメネス朝ペルシア王**ダレイオス1世**の馬の世話をする馬丁**オイバレス**の計略により最初に馬をいなくなせることに成功した**ダレイオス1世**（在位：BC522～486）が王となった。

ヘロドトスによれば、**ダレイオス1世**は**カンビュセス2世**の槍持ちとして親衛隊にいたという。この職業は王に極めて近い人物のみが付く高い職である。**ダレイオス1世**が歴史の舞台に登場するのは**カンビュセス2世**の死去（BC522）とその後の王位継承の争いの頃で、ヘロドトスの「歴史」によると、アケメネス家の傍系のヒュスタスピスの子であったが、初代**キュロス2世**の娘アルテュストネと結婚、第2代**カンビュセス2世**のエジプト遠征に従って功績を挙げた。**カンビュセス**王の死後に反乱が起こると、彼がそれを鎮圧して第3代の王位に就いたという。

※1 ヘロドトス：BC480、小アジアの西南部のハリカルナッソスに生まれた、ギリシア・アテネの歴史家で「歴史の父」とも言われる。**ペルシア戦争**をテーマとした「歴史」を著した。

※2 マギ（マゴス僧）：メディア王国で宗教儀礼をつかさどっていたペルシア系祭司階級。

ヘロドトスの「歴史」には、「マギには、死体を鳥や犬に食いちぎらせたり、アリや蛇をはじめその他の爬虫類などを無差別に殺す特異な習慣があった」と記されている。



04 その支配が確立するやいなや、この王国は砕かれて（アレキサンドロス大王は破竹の勢いで世界帝国を建設するが、BC323、バビロンで死去してしまう。）天の四方向に分割（①エジプトのプトレマイオス朝②シリアのセレウコス朝、③マケドニアのカッサンドロス（カサンドロス）朝、④小アジアのリュシマコス朝）される。彼（アレキサンドロス大王）の子孫はこれを継がず、だれも彼のような支配力を持つ者はない（アレキサンドロスは、「最強の者が帝国を支配せよ」と後継者を決めなかった）。この王国は根こそぎにされ、子孫以外の支配者たちに帰する（ディアドコイー後継者一戦争）。

→アレキサンドロスは、「最強の者が帝国を支配せよ」と後継者を決めなかったことから、彼の死後、4人の将軍たちによって帝国は分割された。

→ディアドコイ（後継者）戦争～BC280頃

- ①エジプトのプトレマイオス朝
- ②シリアのセレウコス朝
- ③マケドニアのカッサンドロス朝
- ④小アジアのリュシマコス朝



出典(図)：同上

マケドニアとギリシアを占領したカッサンドロス朝と小アジアとトラキアを占領したリュシマコス朝は、長続きしなかったが、シリアを占領したセレウコス朝とエジプトを占領したプトレマイオス朝は長く続いた。やがて、両者は対立するようになる（南北王朝時代）。

シリアとエジプトの間に位置するエルサレム（ユダ、イスラエル）の地から見ると、

シリアのセレウコス朝は「北の王」、エジプトのプトレマイオス朝は「南の王」である。

→アレクサンドロス大王の死後、パレスチナ（エルサレム）はエジプトを中心としたプトレマイオス朝の支配下に置かれた（上図B帝国の分裂参照）。

05 このうち、南の王（アレキサンドロス大王の将軍の一人、エジプトのプトレマイオス1世ソテル）となった者は強くなるが、将軍の一人（セレウコス1世ニカトル）→アレキサンドロス大王の領土の大部分を治めた）が王をしのぐ権力を取り、大いに支配する。

06 何年後、二国（シリアのセレウコス朝とエジプトのプトレマイオス朝）は和睦し、

南の王（エジプトの王プトレマイオス2世フィラデルフォス）の娘（ベレニケ）は

北の王（シリアの王アンティオコス2世テオス）→妻ラオディケを離縁）に嫁ぎ、両国の友好を図る。

（→同盟関係を築くための政略結婚）

だが、彼女（ベレニケ）は十分な支持を得ず（→勢力をとどめておくことができず）、その子孫も力を持たない。

→プトレマイオス2世フィラデルフォス：プトレマイオス朝の創始者プトレマイオス1世と側室ベレニケ1世（正妻エウリディケの侍女）の息子

06（後半）やがて、彼女（ベレニケ）も、供の者（→親エジプト派の指導者たち）も、彼女の子らも、その支持者らも裏切られる。

→プトレマイオス2世フィラデルフォス（BC308～246、在位：BC288/285～246）が亡くなると、政略結婚で離縁された元妻ラオディケは、逆襲に出て、自分を外に追いやった元夫アンティオコス2世を毒殺、ベレニケとその子らも殺害した。

そして、ラオディケは、自分の子のセレウコス2世カリニコスを王位につけた。



07 だが、彼女（ベレニケ）の実家から一つの芽（ベレニケの弟**プトレマイオス 3 世エウエルゲテス**）が出て支配の座に着き、（シリアの）北の王の城塞に攻め入ってこれを破り、（**セレウコス 2 世カリニコス**は逃亡、）勝利を得る。

→元夫**アンティオコス 2 世テオス**を毒殺、**ベレニケ**と**その子ら**も殺害し、復讐を終った**ラオディケ**は、自分の子である**セレウコス 2 世カリニコス**を王位につけた（06 節）。

このことが、**ベレニケの弟****プトレマイオス 3 世エウエルゲテス**の怒りを招き、姉**ベレニケ**の復讐をするためにシリアへ侵攻し、首都の**アンティオキア**を占領、**ラオディケ**を殺した（**第 3 次シリア戦争**：BC246～241）。この時、殺された**ラオディケ**の子、北の王**セレウコス 2 世カリニコス**は逃亡、小アジアに身を隠した。

08 彼（**ベレニケの弟****プトレマイオス 3 世エウエルゲテス**）は戦利品として、**鑄物の神像**や**金銀の財宝**をエジプトに運び去る。（南の王、**ベレニケの弟****プトレマイオス 3 世エウエルゲテス**は）その後何年か、北の王に対して手を出さない（→遠ざかっている）。

09 北の王（シリアの**セレウコス 2 世カリニコス**）は南の王国（エジプト）に向かっているが、（その侵略は失敗し）自分の国（シリア）に引き揚げる（→帰還する）。

※10～12 節：**第 4 次シリア戦争**（BC219～217）

10 **その子ら**（**セレウコス 2 世カリニコス**の息子、兄の**セレウコス 3 世**と弟の**アンティオコス 3 世**）は奮い立って進軍し、洪水のような一進一退の後、敵（エジプト）の城塞に攻め寄せる。

11 南の王（**プトレマイオス 4 世フィロパトル**）は激怒して出陣し、

北の王（**アンティオコス 3 世**）と戦う。

北の王（**アンティオコス 3 世**）は大軍を集めて立ち向かうが、

彼ら（**アンティオコス 3 世**たち）は敵の手に陥る（→**ラフィアの戦い**：BC217）。

→ラフィアの戦いで**アンティオコス 3 世**は敗れ、**セレウコス朝**の南部シリア方面への拡大政策は頓挫し、**プトレマイオス朝**は自国領土を防衛することに成功した。

→後に、北の王**アンティオコス 3 世**はユダヤ人の加勢を受け、

南の王**プトレマイオス 5 世エピファネス**※1と戦ったが、失敗に終わった（11：14）。

しかし、北の王**アンティオコス 3 世**は BC200 年、**パネアスの戦い**でエジプトを破る（11：15）。

→**セレウコス朝**（北の王）は**パレスチナ**の支配権を獲得し、**セレウコス朝**による支配時代が到来する。

BC197 年まで、**パレスチナ**を支配下に置いたが、

和平のために、**アンティオコス 3 世**は、

娘の**クレオパトラ 1 世**をエジプトの王**プトレマイオス 5 世エピファネス**に嫁がせた。※2

→**マグネシアの戦い**：BC190、ローマの将軍が**アンティオコス 3 世**を倒した。

※1：エピファネス：「神の顕現」

※2：**第 5 次シリア戦争**（BC202～195）により、**セレウコス朝**シリアの**アンティオコス 3 世**はエジプトより、**コイレ・シリア**（シリア地方南部の地方名）など広大な領域を奪取した。

**プトレマイオス 5 世エピファネス**の後見人たちはローマに援助を求め、ローマ調停の下でシリア・エジプト間の和平が成立した。

**アンティオコス 3 世**の娘である**クレオパトラ 1 世**は、**コイレ・シリア**などを持参金として、

**プトレマイオス 5 世エピファネス**と結婚した（実際には持参金となる領土は与えられなかった）。

**クレオパトラ 1 世**は、BC180 年、夫が持参金となるはずの領土を狙い戦争の準備をしている最中に死去すると、幼い子**プトレマイオス 6 世フィロメトル**の摂政として実権を掌握した（在位：BC193～176）。そして、兄弟でシリア王となっていた**セレウコス 4 世**と和解し平和を保った。BC176 年死去。

※世間一般に美女「**クレオパトラ**」として浸透しているのは、**クレオパトラ 7 世**のことである。



## 【参考】

ダニエル書11章に登場するギリシアの南北王朝

北の王シリアのセレウコス王朝		南の王エジプトのプトレマイオス王朝	
11: 5	セレウコス1世ニカトル BC312/305~281/280	11: 5	プトレマイオス1世 BC323/305~285/282
11: 6	アンティオコス2世テオス BC261~246	11: 6	プトレマイオス2世フィラデルフォス BC288/285~246
11: 7~ 9	セレウコス2世カリニコス BC246~226/225	11: 7~ 9	プトレマイオス3世エウエルゲテス BC246~222 (ペレニケの弟)
11:10	セレウコス3世 BC226~223	11:10~13	プトレマイオス4世フィロパトル BC222/221~205/204/203
11:10~14	アンティオコス3世 BC223~187	11:14~15	プトレマイオス5世エピファネス BC204/203~181/180
11:15、21	アンティオコス4世エピファネス BC175~164 (セレウコス4世の弟)	11:17	クレオパトラ1世 BC193~176
11:20	セレウコス4世フィロパトル BC187~175 (アンティオコス3世の子)		
11:25~27	アンティオコス6世 BC145~142	11:25~27	プトレマイオス6世フィロメトル BC180~145
		11:28	クレオパトラ2世 BC173~164、163~127、124~116 (プトレマイオス6世の妹)

⑧世間一般に美女「クレオパトラ」として浸透しているのは、クレオパトラ7世のことである。

12 この大軍を捕らえて南の王（**プトレマイオス4世フィロパトル**）は大いに高ぶり、幾万人もの兵を殺すが、決定的に勝つことはできない。

13 北の王（**アンティオコス3世**）は再び前回にまさる大軍を集め、数年の後に（アンティゴノス朝マケドニア王国の王**フィリポス5世**〈在位：BC221~179〉と同盟を結び）強力な軍隊の軍備を整えて進軍する。→**第5次シリア戦争**（BC202~195）

14 その時には、多くの者が南の王（**プトレマイオス5世エピファネス**）に対して立ち上がる（→その時は、他の国々もエジプト攻撃に加わる：LB：THE LIVING BIBLE）。

お前の民（**アンティオコス3世**と同盟を結んだユダヤ人たち）の中からも、暴力に頼る者（→口語訳：あなたの民のうちのあらくれ者）らが幻を成就させようとして立ち上がるが、失敗する。

→北の王**アンティオコス3世**はユダヤ人の加勢を受け、

南の王**プトレマイオス5世エピファネス**※1と戦ったが、失敗に終わった（11：14）。

※1：エピファネス＝「神の顕現」

以下のような考え方もあるので参考として記します。

最初は、**セルウコス（北）**が**プトレマイオス（南）**を攻撃する。→11：5~15

次に、**異教ローマ**が勃興し、先の力は影が薄くなっていく。→11：16~28

そして、**異教ローマ**から出て来た**ローマ教皇**が巨大な勢力を持つ。→11：29~39

→最終時代に、**ローマ教皇**は**北の王**のように、再度、人々の前にあらわになる。

→ローマ教皇は権威と威信を取り戻し始め、世俗の敵対者と神の民に戦いを仕掛けて来る。

→神の民に対して最終攻撃を開始することで成功するが、神が介在するので、それは失敗に終わる。

→結果、神の民は救われ、悪は取り除かれる。

※北の王：セレウコス朝→ローマ教皇（教皇制ローマ）、南の王：プトレマイオス朝→無神論等



15 北の王 (アンティオコス 3 世) は進軍し、堡壘 (砦：とりで) を築き、砦に守られた町を占領する。

南の王 (プトレマイオス 5 世エピファネス) ※1 はこれに抵抗する力を持たず、えり抜きの軍勢も立ち向かうことができない (→それから、シリアの王とその同盟国の大軍が攻め寄せ、エジプトの要塞化された町を包囲し、ついに占領する。エジプトが誇る精兵も打ち負かされる：LB)。

→北の王 アンティオコス 3 世 は BC200 年、**パネアスの戦い** でエジプトを破る (11：15)。

→セレウコス朝 (北の王) は **パレスチナ** の支配権を獲得し、セレウコス朝による支配時代が到来する。

BC197 年まで、パレスチナを支配下に置いたが、

和平のために、アンティオコス 3 世 は、

娘の **クレオパトラ 1 世** をエジプトの王 **プトレマイオス 5 世エピファネス** に嫁がせた。 ※2

→**マグネシアの戦い**：BC190、ローマの将軍がアンティオコス 3 世を倒した。

※1：エピファネス＝「神の顕現」

※2：**第 5 次シリア戦争** (BC202～195) により、セレウコス朝シリアの **アンティオコス 3 世** はエジプトより、コイレ・シリア (シリア地方南部の地方名) など広大な領域を奪取した。

**プトレマイオス 5 世エピファネス** の後見人たちはローマに援助を求め、ローマ調停の下でシリア・エジプト間の和平が成立した。

**アンティオコス 3 世** の娘である **クレオパトラ 1 世** は、コイレ・シリアなどを持参金として、

**プトレマイオス 5 世エピファネス** と結婚した (実際には持参金となる領土は与えられなかった)。

**クレオパトラ 1 世** は、BC180 年、夫が持参金となるはずの領土を狙い戦争の準備をしている最中に死去すると、幼い子 **プトレマイオス 6 世フィロメトル** の摂政として実権を掌握した (在位：BC193～176)。そして、兄弟でシリア王となっていた **セレウコス 4 世** と和解し平和を保った。BC176 年死去。

11：16 敵は意のままに行動し、対抗する者はない。あの『麗しの地』(ユダヤ、あるいはイスラエル) に彼は支配を確立し、一切をその手に収める。

→アンティオコス 4 世の時代の事跡で特筆すべきことはプトレマイオス朝との戦いに勝利を収めたことである。この勝利により、**アンティオコス 4 世エピファネス** はエジプト征服の寸前までいったが、中東の軍事バランスが崩れることを危惧したローマ軍の介入 (ローマ元老院は特使ポピリウスを派遣し、エピファネスに即時停戦を命じた元老院決議を手渡し、即時承諾させ、エジプトから軍を撤収させた) と、ユダヤでおきた反乱 (**マカバイ戦争**) のため、断念せざるを得なかった。

シリアがエジプトから撤退した後、ローマは BC64、北の王シリアを征服し、属州とした。

翌年には、ローマのポンペイウスが『麗しの地』であるユダヤ (イスラエル)、エルサレムを占領、神殿を破壊し ※1、多数のユダヤ人を殺害、をローマの属州とした。

→※1 紀元前 63 年、ポンペイウスはさらに南下して、フェニキア及びシリアの主要な都市を抑えた後、ユダヤへと進軍した。当時のユダヤはハスモン朝のヒルカノス 2 世とアリストブロス 2 世の兄弟が王位・大祭司職を巡って争っている最中で、両勢力は競ってポンペイウスを引入れようと接近した。しかし、アリストブロス 2 世がポンペイウスを侮る態度を示したことから、ポンペイウスはヒルカノス 2 世を支援することを決め、ポンペイウスとヒルカノス 2 世の連合軍はアリストブロス 2 世が守るエルサレムを包囲した (エルサレム攻囲戦)。アリストブロス 2 世派の頑強な抵抗とエルサレムの堅牢な守りの前にローマ軍は苦戦を強いられたが、3 ヶ月後の包囲戦の末に陥落させ、アリストブロス 2 世を捕虜とした。なお、ポンペイウスはアリストブロス 2 世をローマへ連行したが、アリストブロス 2 世は後に逃亡、ローマに対する反乱を再三に渡り首謀者として起こすこととなる (ウィキペディア「グナエウス・ポンペイウス」)。

北 (シリア) のセレウコス朝と南 (エジプト) のプトレマイオス朝の戦いが脈々と繰り広げられている。イスラエルは、これら両国の間に位置している。  
サタンは、これらの戦いを通して、神の民を迫害しようと謀ったのである。



【参考】ヘレニズム時代のユダヤ史

① プトレマイオス朝支配時代：BC301～200

② セレウコス朝支配時代：BC200～142

③ ハスモン朝支配時代：BC142～ 63

※ プトレマイオス朝とセレウコス朝の間で起こった戦争を**シリア戦争**（第1次～第6次）と呼ぶ。

【参考】アンティオコス4世エピファネス Antiochus IV Epiphanes

アンティオコス4世エピファネスは、30 数名のシリアの王たちの中で 8 番目の王として在位（BC175～164）、イスラエル（ユダ）のギリシア（ヘレニズム）化を宣言した。

→①セレウコス1世ニカトル、②アンティオコス1世ソテル、③アンティオコス2世テオス、④セレウコス2世カリニコス、⑤セレウコス3世ケラウノス、⑥アンティオコス3世メガス、⑦セレウコス4世フィロパトル、⑧アンティオコス4世エピファネス

イスラエルは**ディアドコイ戦争**の後にプトレマイオス朝の支配する所となっていた。その統治下においてユダヤ人の生活は比較的平穏であったと考えられている。その後、数次にわたる**シリア戦争**の後、イスラエルはセレウコス朝の支配下に入った。イスラエルを征服したセレウコス朝の王アンティオコス3世は地元の支持を得るためにユダヤ人に寛容な姿勢を持って望んだが、彼の死後王位を継いだセレウコス4世、そしてその後のアンティオコス4世エピファネスの時代に入ると俄かに情勢が変化した。

アンティオコス4世エピファネス 社会制度をはじめ、文化的にも宗教的にも強硬なギリシア改革を実施

BC169/168、エルサレムに侵攻したエピファネスは、「ユダヤ教禁止令」（BC167）を發布し、ユダヤ教の弾圧に踏み切った。エルサレムにおけるギムナジウム（体育競技場）やエフェペイオン（青年訓育場）といったギリシア風の建設物の建立、そしてエルサレム神殿にはギリシアの神ゼウスの像を置き、ユダヤの至る所にゼウス神の祭壇を建て、ユダヤ人にギリシア式の祭儀、ゼウス礼拝を強要した。安息日や割礼などの戒律を守る者は死刑に処され、ユダヤ教聖典は焼かれた。彼は反抗するユダヤ人を徹底的に弾圧した（8万人のユダヤ人が殺害され、4万人が捕囚となり、更に4万人の女性・子供が奴隷として売り払われた）。→マカバイ記一1：20～64、マカバイ記二5：11～7：42

こうして、アンティオコス4世エピファネスの君臨したセレウコス朝は、ユダヤ共同体のアイデンティティを危機に曝した。→これをアンティオコス4世の迫害と呼んでいる。

そして、BC167、ついにユダヤ人たちはシリアに反乱、抵抗するため武装し立ち上がった。これは主要指導者ユダ・マカバイにちなんで**マカバイ戦争**とよばれる。

この時、精神的に知能顧問的役割をしたのが「敬虔派ユダヤ教徒（ハシディーム）」と呼ばれる、後期ユダヤ教の主流を形成していく宗教集団（起源は不明）—敬虔派の信仰は全ユダヤに広まったわけではない。しかし、敬虔派はファリサイ派やエッセネ派の起源であるとされ、その信仰は民衆に広く浸透したと思われる。—であった。

**マカバイ戦争**をユダヤ側からの視点で描いたものがハスモン朝時代に成立した旧約聖書外典「マカバイ記一、二」（ヘレニズム時代のユダヤの歴史書）である。

★**ダニエル書**はアンティオコス4世の迫害に苦しむユダヤ教徒を激励する為に書かれ、反セレウコス朝の宣言書という性格を内包している。非政治的であったダニエル書がどのようにして敬虔派以外のユダヤにも公表され、マカバイ戦争に関わったかについて明確な記述はない。

しかし、**ダニエル書（黙示文学）はアンティオコス4世の迫害期、マカバイ戦争初期に成立し、敬虔派の信仰は後期ユダヤ教の主流を形成していった。** ★：次ページ「ダニエル書第11章の研究」P.54～55



【参考】「ダニエル書第 11 章の研究」 西南学院大学大学院 国際文化研究科 佐藤友梨

以下、西南学院大学大学院国際文化研究論集 9 号 (2015 年、ISSN:1881719X)「ダニエル書第 11 章の研究」ヘレニズムと衝突するユダヤの宗教アイデンティティ 国際文化研究科 佐藤友梨を参照

A Study on Daniel Chapter 11 : The Religious Identity of Judaea Conflicting with Hellenization

<http://repository.seinan-gu.ac.jp/handle/123456789/1094>

**マカバイ党**は、後にセレウコス朝から独立したハスモン朝を立てるマカバイ家によって組織されていた。マカバイ家は、ユダ、ヨナタン、シモンといった兄弟らに指揮権が受け継がれ、シモンによってセレウコス朝から独立したハスモン朝は立てられた (前 142 年)

**敬虔派ユダヤ教徒 (ハシディーム)**は起源こそ不明ではあるが、後期ユダヤ教の主流を作った集団で、**ダニエル書**の著者が所属した。迫害期 (前 167~164 年)に突如として脚光を浴び、その後のユダヤ教の主流となるファリサイ派とエッセネ派の源流ともなる集団である。

**ダニエル書** (黙示文学) はアンティオコス 4 世エピファネスの迫害期、マカバイ戦争初期に成立し、敬虔派の信仰は後期ユダヤ教の主流を形成していった。

敬虔派の信仰は全ユダヤに広まったわけではない。しかし、敬虔派はファリサイ派やエッセネ派の起源であるとされ、その信仰は民衆に広く浸透したと思われる。

マカバイ党との関連から、中央の政治勢力と結び付いていたユダヤ教とは隔たりのある集団であったと考えられる。彼らの信仰的特徴として、律法に対する厳格な姿勢が挙げられる。

**ダニエル書**は、マカバイ家の武力行使による反セレウコス運動を積極的に評価していない。それはダニエル書の持つ制約—内容がアンティオコス 4 世エピファネスの迫害を示していることを、セレウコス朝側に知られてはならない—に起因することも考えられる。そのため、「マカバイ家の働きを詳細に描写することは、敬虔派の著者にとり、非常に危険であったため、敢えて消極的な描写に留めた」と推測できる。

**ダニエル書**は、アンティオコスの政治に抵抗したユダ・マカバイとその一族 (マカバイ戦争の中心の力を握り、人びとを動かしていた) を中心とする**敬虔派ユダヤ教徒 (ハシディーム)**の一員によって記されているため、敵対関係にあったセレウコス朝やセレウコス朝に追随するヘレニスト (ギリシア改革派) ユダヤの立場には全く理解を寄せていない。敬虔派に反する立場であれば峻拒する姿勢である。こうした点から、ダニエル書の記述は非常に偏ったもので、アンティオコス 4 世エピファネスに関する記述にも誇張が含まれている。

**ダニエル書** 11 章は、ユダヤがエルサレムで起こした反乱 (**ヤソンの反乱 11 : 30、マカバイ戦争**) についてはほとんど語らず、またヘレニスト (ギリシア改革派) との対立、殉教の過酷さは曖昧な表現に留められ、「アンティオコス 4 世エピファネスがローマによって受けた屈辱がユダヤに向けられた」と読むことができる。アンティオコス 4 世エピファネスとしては、エルサレムの反乱を軍力で圧倒することで、領内を牽制する意図もあったと思われる。

**マカバイ記一**は、アレクサンドロス大王の東方遠征と死から後継者の争いに短く触れた後、アンティオコス 4 世エピファネスの即位 (前 175 年) からハスモン朝のヨハネ・ヒルカノスの即位 (前 134 年) に至る約 40 年に及ぶパレスチナにおけるユダヤとセレウコス朝の争いを記している。ハスモン家 (マカバイ家) の功績を讃え、ハスモン家による世襲を正当化する意図が認められる。BC134~124 年にヘブライ語で記されたが、現在はギリシャ語が残っている。

**マカバイ記二**は、マカバイ記一と平行する歴史を別の視点から記した歴史書である。キュレネのヤソンと呼ばれるユダヤ歴史家の 5 巻本の歴史書を編者が 1 巻に要約したもので、原語はギリシャ語である。

参考 : 「ダニエル書第 11 章の研究」 西南学院大学大学院国際文化研究科 佐藤友梨

### 【参考】 敬虔

「敬虔」とは「宗教における主観的側面」を示す言葉で、へりくだって神に自己をゆだねる態度をいう。  
(石井次郎著「敬虔」『キリスト教大事典』1991 年 (改訂新版第 10 版))



**【参考】 ダニエル書の持つ特性と史料としての妥当性と限界性**

ダニエル書は歴史書ではなく黙示文学である。

従って、歴史書のように登場人物の実名が記されることはなく、正確な地名や年代も書かれているわけではない※1。ダニエル書から歴史の正確な情報を取得することは難しいのである。

また、ダニエル書は敬虔派による偏った視点で構成されている。

ダニエル書は、アンティオコスの政治に抵抗したユダ・マカバイとその一族（マカバイ戦争の中心的な力を握り、人びとを動かしていた）を中心とする敬虔派ユダヤ教徒（ハシディーム）の一員によって記されているため、敵対関係にあったセレウコス朝やセレウコス朝に追従するヘレニスト（ギリシア改革派）ユダヤの立場には全く理解を寄せていない。敬虔派ユダヤ教徒（ハシディーム）に反する立場であれば峻拒する姿勢である。こうした点から、ダニエル書の記述は非常に偏ったもので、アンティオコス4世エピファネスに関する記述にも誇張が含まれている。

※1：ダニエル書は舞台設定がBC6世紀であるが、成立はBC2世紀（BC167～164）とされている。

ダニエル書の中にもネブカドネツアルなどの王名は登場する。しかし、これらは全てダニエル書の物語の舞台設定であるBC6世紀の登場人物である。それに対して、ヘレニズム期のアレクサンドロス大王やアンティオコス4世の実名は登場していない（理由：P.9 敬虔派ユダヤ教徒〈ハシディーム〉を参照）。

参考：「ダニエル書第11章の研究」P.57 西南学院大学大学院国際文化研究課 佐藤友梨

17 彼（アンティオコス3世）は南の王国全体を支配しようと望み、和睦を図り、娘（クレオパトラ1世）を与え、それによってこの国を滅ぼそうとするが、娘の力は続かず、役に立たない。→参照：15節

18 次に、彼は島々に目を向け、その多くを占領するが、ある軍人が彼の悪行にとどめ（→止め）を刺し、その悪行に報いる。

19 北の王は自国の城塞に帰るが、そこで失墜し、倒れて消えうせる。

20 彼（アンティオコス3世）に代わって立つ者（セレウコス4世フィロパトル）は、王国の栄光のためにと、税を取る者を巡回させる。しかし、幾日もたたないうちに、怒りにも戦いにも遭わずに滅び去る。→セレウコス4世フィロパトルは、財務大臣ヘリオドロスを派遣し、エルサレム神殿に納められていた多額の金を奪おうとした（マカバイ記2章3節）。

21 代わって立つ者は卑しむべき者（セレウコス4世フィロパトルの弟、アンティオコス4世エピファネス）で、王としての名誉は与えられず、平穏な時期に現れ、甘言（→相手の気に入るように巧みに言う言葉＝巧言）を用いて王権を取る。

22 洪水のような勢力も彼によって押し流され（→一掃され）、打ち破られ、契約の君も破られる。

23 この王は、僅かの腹心と共に悪計を用いて多くの者と同盟を結び、勢力を増し、強大になって行く。

24 平穏な時期に彼は最も豊かな地方（エジプト）を侵略し、先祖のだれもしたことの無いようなことを行い、戦利品や財宝を分配する。また、諸方（→ほうぼう、あちこち）の砦に対して計略を練るが、それは一時期のことである。

25 やがて彼は力と勇気を奮い起こし、南の王（プトレマイオス6世フィロメトル）に対して大軍を整える。南の王も非常に強大な軍勢をもってこれと戦うが、計略にかかり、勝つことができない。

26 すなわち、南の王の禄を食む（→俸禄を受ける、任官する→主君に仕える）者ら自身が彼を打ち破る。その軍勢は押し流され、多くの者が傷つき倒れる。

27 これら二人の王は、互いに悪意を抱きながら一つの食卓を囲み、虚言を語り合う。しかし、何事も成功しない。まだ終わりの時ではないからである。

28 北の王は莫大な富を獲得して自国に引き揚げる。聖なる契約に逆らう思いを抱いて、ほしいままにふるまい、自国に帰る（→アンティオコス4世エピファネスはエジプトのアレクサンドリアを征服しようとしたが失敗、BC169、パレスチナ経由で神殿を攻撃、貴重な祭具や宝物を略奪し、シリアに帰還した〈マカバイ記1：20～24〉）。



29 時が来て、彼（アンティオコス 4 世エピファネス）は再び南に攻め入る（第 2 次エジプト遠征）が、これは最初でも最後でもない（岩波訳：今回は前回とは様相が違って来る）。

→それから、定められた時に、すでに脅しをかけていたように、再び南へ軍隊を進めるが、今度は以前のようにはいかない。（LB）

→「これは最初でも最後でもない（岩波訳：今回は前回とは様相が違って来る）」という記述は、

第 1 次エジプト遠征（BC170～169、プトレマイオス朝の領土であったペルシウムを征服した）とは異なり、今回（BC168）の第 2 次エジプト遠征は、西から来たローマの船団（ローマの軍司令官、政治家、執政官〈コンスル〉：ルキウス・コルネリウス・スキピオ・アジアテクス Lucius Cornelius Scipio Asiaticus、特使：ポピリウス）の干渉によりエジプト侵攻を阻止され、断念したことを意味している。

この時、アンティオコス 4 世エピファネスはエジプトのアレクサンドリア近郊まで迫り、プトレマイオス朝の征服は目前であった。しかし、ローマの特使ポピリウスがアンティオコス 4 世エピファネスにエジプトへの侵攻を止めるように迫り、結果、アンティオコス 4 世エピファネスはエジプトから撤退することを決め、憤怒と苦悶を胸に秘めながらシリアへと引き揚げた。

アンティオコス 4 世エピファネスのローマに対する屈従は、彼の死の噂と結び付いて、パレスチナやフェニキア諸都市（BC3 世紀はプトレマイオス朝に属していた）の反セレウコス勢力を力付けた。

アンティオコス 4 世エピファネスにより、罷免されていた元大祭司（大祭司オニアス 3 世の弟、BC175～172 年に大祭司職に在った）ヤソンは、反乱を起こし、エルサレムにギリシア風の建設物・体育競技場（ギュムナジウム）や青年訓育場（エフェペイオン）を建立し、ギリシア風の生活様式を持ち込んだ。その様子はマカバイ記に記されており、ヤソンがユダヤにギリシア主義を奨励する様子を「律法に反する」とし否定的に記述している（マカバイ記二 4：7～22）。しかし、ダニエル書にはヤソンに関する記述はない（使徒言行録 17：5～7、9、ローマ信徒への手紙 16：21 に登場する）。

ヤソンのギリシア化政策に対する、ダニエル書 11 章の沈黙は、敬虔派ユダヤのヤソンのギリシア改革に対し、肯定も否定もしない反応である（都市がどれほどギリシア化され、生活がギリシア風になろうと、黙示し、触れなかった）からと考えられる。

30 キティム（→ローマ人に対する呼称）の船隊が攻めるので、彼（アンティオコス 4 世エピファネス）は力を失う※<sub>1</sub>。彼は再び聖なる契約（→神とユダヤ教徒の間で結ばれた契約で、敬虔派はこの契約を固く守ることによって、ユダヤ人としてのアイデンティティを保とうとした）に対し、怒りを燃やして行動し、また聖なる契約を離れる者※<sub>2</sub>があることに気づく※<sub>3</sub>。

→※<sub>1</sub>：BC163 年、アンティオコス 4 世エピファネスは再びエジプト戦略を目論んだ（11：29）が、西から来たローマ艦隊（ローマの軍司令官、政治家、執政官〈コンスル〉：ルキウス・コルネリウス・スキピオ・アジアテクス、BC2 世紀、生没年不詳）によって阻止された。→参照：前節

※<sub>2</sub>：ユダヤ教を棄教し、ギリシア宗教に改宗したユダヤ人

※<sub>3</sub>：父祖の信仰を捨ててしまった不信仰なユダヤ人を、権力の座につかせる。（LB）

その聖なる契約を捨てた者たちを重く取り立てるようになる。（新改訳）

→エジプトからシリアへ引き上げる途上にあったアンティオコス 4 世エピファネスはエルサレムに立ち寄り、武力を以てエルサレムを占領し、ユダヤの監視と治安維持の為に軍隊をエルサレムに常駐させた。



31 彼 (アンティオコス 4 世エピファネス) は (ユダヤを監視、迫害するためにセレウコス朝から) 軍隊 (→この時期、セレウコス朝はギリシア系軍人が不足しており、兵士の多くは地方から集められたシリア人であり、シリア人が崇拝していた「天の主 (バアル・シャメーン)」※1はゼウス神であった) を派遣して、**砦すなわち聖所を汚し、日ごとの供え物** (→口語訳：常供〈じょうく〉の燔祭＝ターミード、常燔祭、ユダヤ共同体が神との契約に留まるための日毎の朝夕に絶やさずささげる燔祭) を廃止し、**憎むべき荒廃をもたらすもの** (口語訳：荒らす憎むべきもの) を立てる (→シリア人の宗教祭儀の場としてユダヤの神殿が用いられ、天の主〈バアル・シャメーン〉※1の礼拝を行った〈マカバイ記一 1: 11~15、54)。

### 【参考】 憎むべき荒廃をもたらすもの

1. マルティン・ルター Martin Luther は、ローマ教皇制とその教理や宗教的習慣であると見なした。  
 2. ギリシアの多神教の主神であるゼウス神とも同一視される神＝天の主 (バアル・シャメーン)。  
 アンティオコス 4 世エピファネスは治世末期にユダヤ人の礼拝と習慣を破壊しようとした。祭司権力に介入し、エルサレム神殿における日ごとの献げ物を廃止 (理由：ユダヤ式祭儀がシリア・フェニキア諸都市からは迷信的で奇異に映ったために、ギリシア的なシリア式祭儀が導入されたと思われる) させ (8: 13)、神殿に異教の偶像 (ギリシアの多神教の主神であるゼウス、右図) を置くなどした。ユダヤ教は固く偶像崇拝を禁じていたので、偶像を神殿に奉じられたユダヤの憤りは計り知れないものであったと思われる。その怒りの表現が、「憎むべき荒廃をもたらすもの (口語訳：荒らす憎むべきもの)」(31 節) と呼ばせた。

BC164 のキスレウの月 (第 9 の月：11~12 月)、ユダ・マカバイによって、神殿が清められて再奉献されるまでの 3 年半、これらは神殿の中にあった。

※ 1：天の主 (バアル・シャメーン) とは、BC10 世紀から AD2 世紀中葉まで、フェニキ



ア人 (東地中海沿岸の現在のレバノンのあたりを拠点に地中海方面に海上貿易に従事していた集団) の勢力圏内において礼拝された神である。フェニキア諸都市は古くからギリシア諸都市との親交が深く、天の主 (バアル・シャメーン) はギリシア神話の神々の父ゼウス・オリュンピオスと同一視されていた。この神の崇拝は地中海を中心に広まっており、シリア人も天の主 (バアル・シャメーン) を崇拝していたと考えられる。つまり、ギリシア神話のアフロディテやメソポタミア神話のイシュタルが愛の女神として同一視されるように、「天の主」も、天空の神であるゼウス神と同一視されていた。

出典 (左図)：世界の歴史まっぷ



フェニキア人 (○部分) の地中海における交易路  
 出典 (左図)：◎アクアスピリット



32 (アンティオコス4世エピファネスは) 契約に逆らう者(神の律法を軽んじるユダヤ人たち)を甘言によって棄教させるが、自分の神を知る民は確固として行動する。

→原文は「そして契約に逆らう者らを彼は棄教させる」である。

→ユダヤの中にはギリシア宗教に改宗したギリシア改革派(ヘレニスト)がいたと考えられるが、当然、厳格なユダヤ教徒は彼らと対立した。

33 民の目覚めた人々(→敬虔派ユダヤ人たち、神を畏れるユダヤの人々)は多くの者を導くが、ある期間、剣にかかり、火刑に処され、捕らわれ、略奪されて倒される。

→敬虔派ユダヤは危機の中で力を尽くし、生命を代償とすることも厭わなかった。

34 こうして倒れるこの人々を助ける(マカバイ戦争を主導したユダ・マカバイ及びマカバイ家のような)者は少なく、多くの者は彼ら(祭司ユダ・マカバイ(ユダス・マカバイオス))にくみする(→与する=力を貸す)が、実は不誠実である。

→マカバイ反乱におけるマカバイ家の活動は「助ける者は少なく」と消極的な表現に留められており、ユダヤ全体がマカバイ戦争に積極的に参加していないことを暗示している。

35 これらの指導者の何人かが倒されるのは、終わりの時(→定めの時:メシヤの到来)に備えて練り清められ、純白にされるためである。まだ(定められた)時は来ていない。

→黙示文学の特徴である終末論がここで示される。これは、迫害の時が神の介入により断絶されるという信仰に基づく。

→迫害の期間は定められているとされる。これこそ迫害に苦しむユダヤの希望であった。

→終わりとは、本来「切る」が名詞化した単語である。つまり、ダニエル書で言及される「終わり」とは、宗教的アイデンティティが奪われ、非暴力主義であるにもかかわらず戦いに身を投じるといふ苦難の時、神の介入により断ち切られる事を意味している。これは、苦難の中にあっても希望を見出すという精神性である。このような精神性を、敬虔派はダニエル書に著わし、迫害に苦しむユダヤを精神的に励まそうとした。



## 【参考】太陽暦・ユダヤ暦・バビロニア暦

太陽暦	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
月（ヘブライ暦）	第一の月	第二の月	第三の月	第四の月	第五の月	第六の月	第七の月	第八の月	第九の月	第十の月	第十一の月	第十二の月	第三の月
ユダヤ暦	ニサン Nisan, Nissan	イヤール Iyyar	シバン Sivan, Sivan	タムーズ Tammuz	アブ Abh, Av	エルール Elul	ティシュリ Tishri	マルヘ シユパン Marcheswan	キスレーヴ Kislev, Kislev	テベツ T'ebheth	シュバツト Səbhāt	アダ Adhār, Adar	アダ Adhār, Adar
バビロニアの月名 (): カナンの古称	ニサン (アビブ)	イヤール (ジウ)	シワン	タンムズ	アブ	エルル	ティシュリ (エタニム)	ヘシュワ (ブ)	キスレウ	テベツ	シェバト	アダ Adhār, Adar	アダ Adhār, Adar
主な行事	← 七週間 → 14~21 逾越祭（ペサハ） 除酵祭		七週祭（シャブオット） II 五旬祭（ペンテコステ Pentecoste ギリシア語） ※ユダヤの三大祭：逾越祭、七週祭、仮庵祭				1: 新年 10: 大贖罪日 15~21: 仮庵祭（スコット）		25: 宮清めの祭 (25日~8日間)				

- ・ユダヤ暦は、日本の旧暦と同じく、月の満ち欠けを基準に月を決める方式（太陰太陽暦）です。
- ・ユダヤ暦は、一日が日没（夕方）に始まり、次の日の日没（夕方）に終わります。それは、聖書の創造の記事に「夕べがあり、朝があった」（創世記1：5他）と記されているからです。
- ・イスラエルでは普段の生活には、西暦も使っていますが、ユダヤ教の祝祭日や公式行事はユダヤ暦によって決められています。
- ・ユダヤ暦は天地創造を起点にして数えることになっており、西暦+3760年（西暦よりも3760年長い）となる。

©聖書ともに会 H.Taniguchi

## 【参考】

エルサレム神殿がマカバイ戦争によりマカバイ家に奪取されると、かつて神殿が穢されたのと同じ日に清めの儀式が行われた。ゼウス像（天の主：バアル・シャメーン）は取り除かれ、再びユダヤ教の聖所として奉献された。これは「宮清めの祭り」（→ハヌカ祭。ユダヤ歴キスレーヴ／キスレウの月〈第9の月：11~12月〉の25日から8日間行われる祭りである。

八枝の燭台ハヌッキーヤー（右図）※<sub>1</sub>に毎夜一灯ずつ灯し加えていく。）と呼ばれ、現代のユダヤにおいても祝われている。この祭りの背景に「荒らす憎むべき者（シクーツ・メシヨーム）」に対する凄まじい思想が内包されている。

※<sub>1</sub>：「メノーラー」（右図）が7枝であるのに対し、八枝の燭台ハヌッキーヤーは8枝（実際は9、右上図）であり、横に広がっている

→神殿奉献記念祭（宮きよめの祭り、宮清めの祭り、ハヌカ祭、ハヌカーの祭り、光の祭り）

聖書中「神殿奉献記念祭」の記述は、ヨハネによる福音書10：22のみで、ハヌカーはヘブライ語で「奉献、献納」という意味である。



旧約聖書続編 マカバイ記ー アレキサンドロス大王（アレクサンダー大王）の東征に始まり、ハスモン朝の支配が確立されるまでの歴史をマカバイ戦争を中心に描いている。そしてそのなかで異邦人に汚されたエルサレム神殿が再び清められたことがハヌカ祭の発祥であると記している。

01：20 こうしてエジプトを打ち破った彼は、第百四十三年、矛先をイスラエルに転じて大軍と共にエルサレムを目指して上って来た。

21 アンティオコス是不遜にも聖所に入り込み、金の祭壇、燭台とその付属品一切、

22 供えのパンの机、ぶどう酒の献げ物用の壺と杯、金の香炉、垂れ幕、冠を奪い、神殿の正面を飾る金の装飾をすべてはぎ取った。

23 更に金や銀や貴重な祭具類、隠されていた宝をも見つけ出して奪い取った。

24 そしてすべてを略奪すると故国に帰った。彼は人々を殺戮し、高言を吐き続けていた。



36 あの王（アンティオコス4世エピファネス）はほしいままにふるまい、いよいよ驕り高ぶって、どのような神よりも自分を高い者とする。すべての神にまさる神に向かって恐るべきことを口にし、怒りの時が終わるまで栄え続ける。

定められたことは実現されねばならないからである（→〈LB〉神様の計画は揺らぐことがないからだ）。  
→エピファネス：（神の）顕現

37 先祖の神々を無視し、女たちの慕う神（メソポタミアの植物の神タンムズ）をも、そして他のどのような神をも尊ばず、自分を何者にもまさって偉大であると思う。

→女たちの慕う神：メソポタミアの植物の神タンムズ（アドニス）

毎年、乾季になると死んで地下に降るとされる豊穡の神。イスラエルにも、ヘブライ暦タンムズの月（現6、7月）にこのタンムズの神の死を嘆き、豊作をもたらすよう、蘇りを祈願する女性たちがいた。

→エゼキエル8:14

38 代わりに、先祖の知らなかった神、すなわち岩の神（カナンの神バアルにあたるギリシアの神ゼウス→アンティオコス4世エピファネスはゼウス神崇拝を奨励した）をあげ、金銀、宝石、宝物でこれを飾り立てる。

39（アンティオコス4世エピファネスは、城壁のある）強固な岩（神の都エルサレム）の数々を異国の神に頼って攻め、気に入った者には栄誉を与えて多くの者を支配させ、封土（→祭壇として高く盛った土）を与える。

40 終わりの時に至って、

南の王（プトレマイオス6世フィロメトル）は彼（アンティオコス4世エピファネス）に戦いを挑む。それに対して北の王（アンティオコス4世エピファネス）は、戦車、騎兵、大船隊をもって、嵐のように押し寄せ、各国に攻め入り、洪水のように通過して行く。

## 【参考】

ダニエル書11章に登場するギリシアの南北王朝

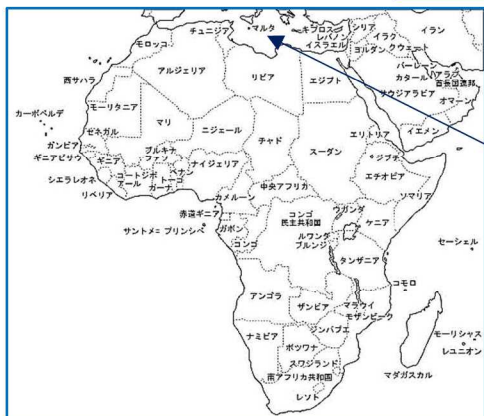
北の王シリアのセレウコス王朝		南の王エジプトのプトレマイオス王朝	
11: 5	セレウコス1世ニカトル BC312/305~281/280	11: 5	プトレマイオス1世 BC323/305~285/282
11: 6	アンティオコス2世テオス BC261~246	11: 6	プトレマイオス2世フィラデルフォス BC288/285~246
11: 7~ 9	セレウコス2世カリニコス BC246~226/225	11: 7~ 9	プトレマイオス3世エウエルゲテス BC246~222 (ペレニケの弟)
11:10	セレウコス3世 BC226~223	11:10~13	プトレマイオス4世フィロパトル BC222/221~205/204/203
11:10~14	アンティオコス3世 BC223~187	11:14~15	プトレマイオス5世エピファネス BC204/203~181/180
11:15, 21	アンティオコス4世エピファネス BC175~164 (セレウコス4世の弟)	11:17	クレオパトラ1世 BC193~176
11:20	セレウコス4世フィロパトル BC187~175 (アンティオコス3世の子)		
11:25~27	アンティオコス6世 BC145~142	11:25~27	プトレマイオス6世フィロメトル BC180~145
		11:28	クレオパトラ2世 BC173~164, 163~127, 124~116 (プトレマイオス6世の妹)



41 あの『麗しの地』(ユダヤ、あるいはイスラエル)もこうして侵略され、多くの者が倒れる。アンモンの選ばれた者、エドム、モアブはその手を免れる(→アンモン、エドム、モアブは、アンティオコス4世エピファネスによる虐殺を免れたが、麗しの地ユダはそうではなかった)。

42 彼(アンティオコス4世エピファネス)は国から国へと手を伸ばし、エジプトもその手を免れえない。

43 エジプトの隠された宝、金銀、宝物はすべて彼(アンティオコス4世エピファネス)の支配するところとなり、リビア(古くはエジプトから西のアフリカの総称であったが、後にエジプトとアフリカのローマの属州との間の地域の呼び名になった。)とクシュ(クシュはエジプト南部で、現在のエチオピアとスーダンにまたがる地域)は彼(アンティオコス4世エピファネス)の進むところに従う。



44 次いで、(アンティオコス4世エピファネス)は東と北からの知らせに危険を感じ、多くの者を滅ぼし絶やそうと、大いに激昂して進軍する。

45 海(→地中海)とあの『麗しの地』(ユダヤ、あるいはイスラエル)の聖なる山(エルサレム神殿がある神殿の丘〈シオンの丘〉)との間に天幕を張って、王の宿営とする。しかし、ついに彼(アンティオコス4世エピファネス)の終わりの時が来るが、助ける者はない。



神殿の丘〈シオンの丘〉(ハラム・シェリーフ)  
エルサレムの旧市街の南東にあるユダヤ教、イスラム教の聖地。  
神殿の丘の上にはイスラム教の施設岩のドーム(AD690年)、鎖のドーム、昇天のドーム、アル=アクサー・モスク(AD710年)が建っている。  
神殿の丘の西側外壁がユダヤ教の聖地「嘆きの壁」である。

※40～45節：アンティオコス4世エピファネスの最期が描かれている。

アンモン、エドム、モアブ(古代イスラエルの東に隣接した地域の古代の地名。ロトとロトの長女との間に生まれた息子モアブに由来する。)は、アンティオコス4世エピファネスによる虐殺を免れたが、「麗しの地」はそうではなかった。

この悪しきアンティオコス4世エピファネスは、地中海とエルサレム間でおこる戦闘によって滅びるとされている(→エゼキエル38、39章、黙示録16:13～16)。

他の古代の資料では、アンティオコス4世エピファネスは、BC164年、ペルシア遠征の帰途に病死したとされている。

【お断り】 以上は、解釈が分かれることを前提として、個人的に研究、整理、まとめたものです。  
ご意見等をいただければ幸いです。





## 【参考】 聖書にある「終わりの時」



タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 21 / 聖句等の総数 33250 (終わりの時)22個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: 終わりの時]
K イザヤ書	13:22 立ち並ぶ館の中で、山犬が／華やかだった宮殿で、ジャッカルがほえる。今や、都に終わりの時が迫る。その日が遅れることは決してない。	
K エレミヤ書	27:7 諸国民はすべて彼とその子と、その孫に仕える。しかし、彼の国にも終わりの時が来れば、多くの国々と大王たちが彼を奴隷にするであろう。	
K エゼキエル書	7:6 終わりが来る。終わりが来る。終わりの時がお前のために熟す。今や見よ、その時が来る。	
K ダニエル書	8:17 彼がわたしの立っている所に近づいて来たので、わたしは恐れてひれ伏した。彼はわたしに言った。「人の子よ、この幻は終わりの時に関するものだと悟りなさい。」	
K ダニエル書	11:27 これら二人の王は、互いに悪意を抱きながら一つの食卓を囲み、虚言を語り合う。しかし、何事も成功しない。まだ終わりの時ではないからである。	
K ダニエル書	11:35 これらの指導者の何人かが倒されるのは、終わりの時に備えて練り清められ、純白にされるためである。まだ時は来ていない。	
K ダニエル書	11:40 終わりの時に至って、南の王は彼に戦いを挑む。それに対して北の王は、戦車、騎兵、大船隊をもって、嵐のように押し寄せ、各国に攻め入り、洪水のように通過して行く。	
K ダニエル書	11:45 海とあの『麗しの地』の聖なる山との間に天幕を張って、王の宿営とする。しかし、ついに彼の終わりの時が来るが、助ける者はない。	
K ダニエル書	12:4 ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい。多くの者が動揺するであろう。そして、知識は増す。」	
K ダニエル書	12:9 彼は答えた。「ダニエルよ、もう行きなさい。終わりの時までこれらの事は秘められ、封じられている。	
K ハバクク書	2:3 定められた時のために／もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。	
S 使徒言行録	2:17 『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。	
S テモテへの手紙 I	4:1 しかし、“霊”は次のように明確に告げておられます。終わりの時には、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者がいます。	
S テモテへの手紙 II	3:1 しかし、終わりの時には困難な時期が来ることを悟りなさい。	
S ヘブライ人への手紙	1:2 この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。	
S ヤコブの手紙	5:3 金銀もさびてしまいます。このさびこそが、あなたがたの罪の証拠となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くすでしょう。あなたがたは、この終わりの時のために宝を蓄えたのでした。	
S ペトロの手紙 I	1:5 あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。	
S ペトロの手紙 I	1:20 キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。	
S ペトロの手紙 II	3:3 まず、次のことを知っていなさい。終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけて、	
S ヨハネの手紙 I	2:18 子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。これによって、終わりの時が来ていると分かります。	
S ユダの手紙	1:18 彼らはあなたがたにこう言いました。「終わりの時には、あざける者どもが現れ、不信心な欲望のままにふるまう。」	



## 【参考】ダニエル書 11 章 単語出現頻度 文章中出现する単語の頻出度



■ 名詞			■ 動詞		
単語	スコア	出現頻度	単語	スコア	出現頻度
王	29.77	29	攻める	1.71	5
南	15.51	13	まさる	4.16	4
北	9.35	11	与える	0.64	4
支配	12.72	10	倒れる	0.52	4
多く	4.04	9	立つ	0.17	3
神	0.85	9	もつ	0.12	3
王国	7.75	6	取る	0.06	3
啓	15.45	5	持つ	0.03	3
契約	1.37	5	入る	0.02	3
大軍	19.75	4	来る	0.01	3
終わりの時	17.05	4	できる	0.01	3
進軍	12.33	4	行く	0.01	3
行動	0.41	4	引き揚げる	8.17	2
まま	0.17	4	押し流す	8.07	2
城塞	13.04	3	打ち破る	5.72	2